
短 報

聖路加看護大学がんプロフェッショナル養成プラン支援事業 がん遺伝看護セミナー報告

大畑 美里¹⁾ 本田 晶子¹⁾ 林 直子²⁾

Report on Cancer Nursing Seminar – Genetic Nursing for Cancer Patients and Families who Receiving Genetic Tests: A Training Program to Support Oncology Professionals

Misato OHATA, RN, MN, CNS¹⁾ Akiko HONDA, RN, MN, CNS¹⁾
Naoko HAYASHI, RN, PHN, PhD²⁾

〔Abstract〕

The seminar was held to improve nurses' basic knowledge about genetic testing and genetic nursing skills and roles for cancer patients and families.

Speakers were three Japanese genetic nursing specialists; they presented basic knowledge of genetic testing and the genetic nursing role by sharing experiences from their own nursing practice.

Attending were 48 participants. According to the results of participants' questionnaires, many participants did not usually work in genetic treatment areas. The majority of participants indicated that the seminar was helpful.

We should continue efforts to extend continuing education to cancer nurses to improved their knowledge and skills in supporting cancer patients and their families.

〔Key words〕 training program for oncology professionals, cancer nursing, genetic nursing

〔要旨〕

がんプロフェッショナル養成プラン支援事業の一つとして、遺伝子診断を受けるがん患者とその家族に対するケアの向上を目指し、がん診療に携わる看護師を対象とした「がん遺伝看護セミナー」を開催した。セミナーでは、遺伝診療部等ががん患者とその家族を対象に看護実践をしている講師を招き、がん看護に必要な遺伝学の基礎的知識、遺伝子診断を受けるがん患者に対する看護の実際をテーマに講演を開催した。

セミナー参加者数は48名であった。アンケートへの回答が得られた44名のうち29名が日常遺伝看護に関わる機会がないと答えており、セミナーのテーマについては22名が「非常によかった」、18名が「よかった」と回答していた。また「今後遺伝看護に関心をもつきっかけとなった」との回答も得られた。

遺伝子診断を受けるがん患者とその家族に対する的確な情報提供や、質の高い看護実践が提供されるよう、今後もがん看護に携わる看護師に対する継続的な教育的取り組みにつなげていきたい。

〔キーワード〕 がんプロフェッショナル養成プラン, がん看護, 遺伝看護

1) 聖路加看護大学 看護実践開発研究センター St. Luke's College of Nursing, Research Center for Development of Nursing Practice

2) 聖路加看護大学 成人看護学 St. Luke's College of Nursing, Adult Nursing

I. はじめに

本学は2007年より文部科学省が助成する「がんプロフェッショナル養成プラン」に参画し、北里大学、慶應義塾大学をはじめとする共にプロジェクトを組む9大学および医療施設との教育連携を基盤に、がん看護専門看護師教育課程およびがん化学療法看護認定看護師教育課程におけるカリキュラム強化を図っている。また南関東圏におけるがんチーム医療のリーダーシップを担うがん医療専門職者に資するため、種々の学術交流、大学院生を対象とした多職種協働サマープログラム、遠隔システムを用いた講演会、セミナー等に取り組んできた。プロジェクトの一環として、本年度は高度ながん看護実践能力の向上を目指し、最新のがん看護の知見を広く共有するため、「がん遺伝看護セミナー：がん遺伝子診断における看護」をテーマにセミナーを開催した。

人の遺伝子解析の進歩に伴い、がん医療においても遺伝子診断が活用され、がんの発症や予後予測のほか、治療方法の選択や使用される薬剤の感受性の判断、化学療法による有害事象の出現予測などに利用されている。がん診療における遺伝子診断は、遺伝性腫瘍の発生前診断、腫瘍の良悪性の鑑別診断、がんの悪性度の評価を目的としている¹⁾。このような腫瘍における詳細な遺伝子解析は、個々のがん患者に対するオーダーメイド治療を提供する可能性を持ち、今後さらなる活用の広がりが予測される。その中で、がん診療に携わる看護師には、遺伝子検査や遺伝診療の理解と、その知識を基盤とするより専門性の高いケアの実践が求められている^{2) 3)}。

そこで、遺伝子検査や遺伝診療を理解する基本的知識の習得と、遺伝相談業務に携わる看護師の実践内容の理解と共有を目的として、本セミナーを開催した。講師には、遺伝診療分野での臨床実践や研究活動で活躍する3名を招聘し、「がん看護に必要な遺伝学の知識」と、「遺伝子診断におけるがん看護の実際」を遺伝性大腸がん、遺伝性乳がん、および遺伝性内分泌腫瘍の事例を用いた講演を依頼した。

本稿では、講演内容と参加者の反応を報告する。

II. セミナー開催について

セミナーは2011年9月10日(土)9:30～13:00に聖路加看護大学講義室にて開催した。セミナー参加者数は48名だった。

セミナーでは、まずがん看護に必要な遺伝学の知識について、遺伝看護分野でがん患者を対象にした支援活動や研究を行っている、兵庫県立大学看護学部講師の川崎優子氏が講演した。講演の中では、遺伝学の基礎知識としてがんの分子生物学(細胞のがん化、がん関連遺伝子



図1 当日用ポスター

など)をはじめ、遺伝性腫瘍と原因遺伝子の概要、ヒトゲノム研究の医療への応用など、現在の遺伝子検査や診断治療を理解するための基礎的知識が説明された。講演の中では、個々の患者の病態や腫瘍に関連した遺伝子の特性の理解に基づくがん看護実践が求められていることが強調された。患者が自分自身のがん発生に関わる遺伝子の役割や遺伝子検査を理解し、適切な医療を活用することを促進する看護援助を行うため、看護師はがん看護だけでなく遺伝学に関する知識を深め、遺伝看護の役割を担うことの必要性を示唆された。

がん遺伝子診断における看護の実際では、臨床でがん患者に対する遺伝カウンセリングを実践している慶應義塾大学看護医療学部大学院健康マネジメント研究科教授の武田祐子氏、東邦大学看護学部講師の角田ますみ氏による講演が2題続いて行われた。

武田氏は、慶應義塾大学病院の臨床遺伝学センターにおける大腸がんと乳がんに対する自身の臨床実践の紹介を通し、遺伝性のがん患者の特徴やがんの診療における遺伝カウンセリングの特徴を解説した。遺伝カウンセリングの中では、特に対象のライフステージを踏まえた病歴や家族歴の情報収集、遺伝診療や遺伝子診断に関する情報提供や教育、心理的支援を行っていることが紹介された。また遺伝子診断を含むがんの診断や治療方針の決定の場面では、個人の価値観に沿った自己決定がなされるような配慮や援助の必要性を述べた。さらに理事を務める日本家族性腫瘍学会が養成する家族性腫瘍コーディ



写真1 会場の様子



写真2 川崎氏講演の様子



写真3 武田氏講演の様子



写真4 角田氏講演の様子

ネーター・カウンセラー制度に触れ、家族性腫瘍をもつ患者や血縁者に対しより専門的な支援を行う専門職の育成と、この問題に対する国家的な取り組みの必要性を訴えた。

角田ますみ氏は、福島県立医科大学附属病院のがんの遺伝外来における遺伝性内分泌腫瘍の事例に対する、自身の看護の実際についてご講演された。相談の対象となる遺伝性内分泌腫瘍をもつ患者は、甲状腺や下垂体、副腎など身体の様々な内分泌組織に腫瘍を形成するため、各部位の治療方法に関する情報提供も行っていることを説明された。また、遺伝性疾患は数世代にわたる家系への問題や、長期にわたる経過観察が必要となるため、多領域での診療体制が必須であり、看護者には遺伝に関わるネットワーク全体をコーディネートする役割が求められていることを提示された。

Ⅲ. 参加者アンケートの結果より (図2～5)

セミナー参加者総数48名のうち、44名からアンケートの回答(回収率91.7%)が得られた。参加者は有職者が33名(75%)、学生が6名(13.6%)、教員5名(11.4%)

であり、職種の内訳は看護師が43名だった(97.7%)。日常業務の中で遺伝看護に関わる機会については「機会がある」15名(34.1%)「機会がない」29名(65.9%)であり、「機会がある」とした人の関わりの方は「臨床:病棟」が5名(27.8%)、「臨床:外来」が4名(22.2%)、「臨床:相談支援部門」が4名(22.2%)、「そのほか」4名(22.2%)であった。

セミナーのテーマについては「非常によかった」22名(50.0%)、「よかった」18名(40.9%)、「ふつう」3名(6.8%)の回答が得られた。

セミナーに参加した感想は「今後遺伝看護に関心を持っていきたいと思うきっかけとなった」「がん治療に関わっており知っていないといけない知識であることをあらためて認識した」「十分に理解したとは言えませんが学びの機会となった。自分ができることを患者の不利益にならないよう気をつけて行っていこうと思った」という意見があった。また今後同様のセミナーで取り上げてほしいテーマについては「継続して遺伝看護を学びたい」「遺伝診療の日本の課題と今後の展望(欧米との比較, 社会保障の状況など)」「遺伝性疾患をかかえた家族のサポートについて」などが挙げられていた。

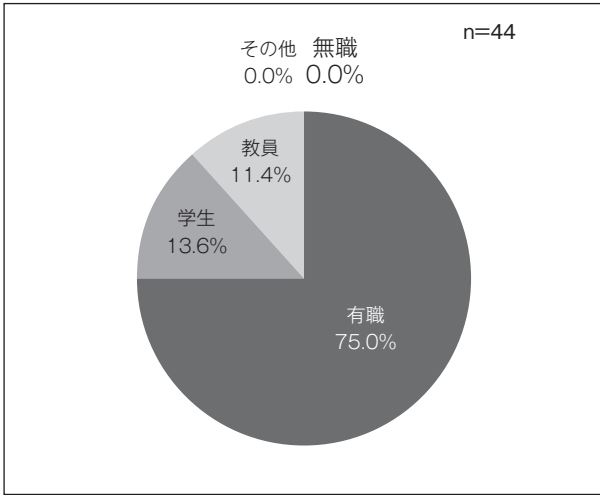


図2 参加者の職種

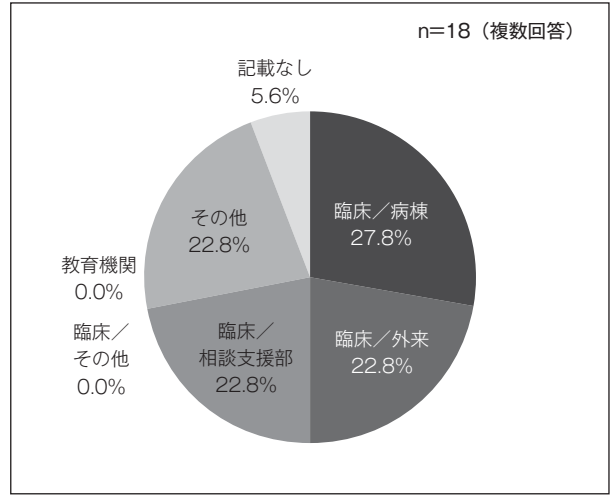


図3 参加者の遺伝看護に関わる機会

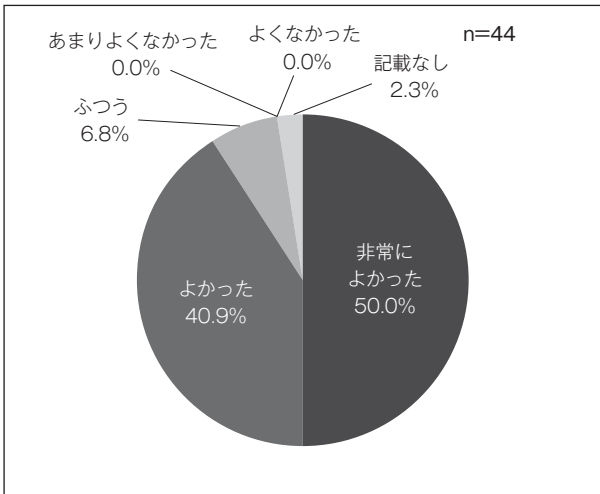


図4 セミナーのテーマについて

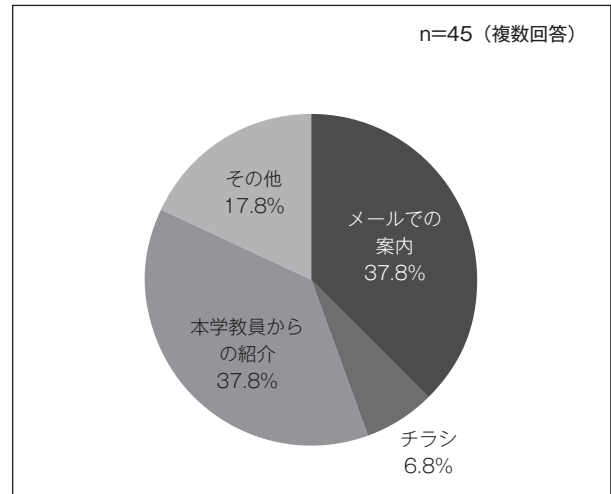


図5 セミナーをどこで知ったか

開催曜日の希望については7名の回答があり、「土日希望」4名、「土曜の半日程度」1名、「土曜の午前」1名、「金曜の夜」1名であった。またセミナーのプログラムの長さについては「もう少し長く時間をとってほしい」「内容が濃いので1日または半日でももう少し時間があつたほうがよかった」という意見が得られた。

IV. アンケート結果からの考察

今回ほぼすべての参加者は看護師であり、その多くは日ごろ遺伝看護に関わる機会がないという回答であった。しかし、参加者が日常の臨床で遺伝子診断や診療に関わっていないとしながらも、本セミナーに参加した背景として、がん診療に携わる看護師は遺伝子診断に何らかの形で関わる機会があるのではないかと推測される。しかし、遺伝子診断に関する知識基盤が十分でないため、その状況をより理解したいという動機が今回のセミナーテーマへの関心につながったのではないかと考えられる。すでにがん診療において遺伝子解析が日常的に行

われる中で、看護師は遺伝子検査のオーダーに関わり、その解析結果を目にすることや、結果に基づく治療において看護実践を行っていると考えられる。例えばがん診療を行う中で患者に遺伝性腫瘍が疑われる場合、患者の遺伝に関する情報を専門的な診療部署や医療機関への紹介がなされる。看護師は次の部署への情報の継続がなされ円滑な診療が行われるよう、遺伝に関わる情報の整理を行い、また患者・家族が遺伝診療という専門的な医療の活用に関する意思決定のプロセスを支える役割が必要とされる。遺伝性腫瘍の疑いがあるまたはその診断を受けた場合、患者は自分自身のがんに直面しながら、家族・家系内の問題についても対処することで精神的負担を持つことも指摘されている⁴⁾。また、川崎氏はセミナーの中で、がん診療において行われる遺伝子検査はまだ保険適応となっていないものも多く、患者とその家族にとって遺伝子検査費用が経済的負担となることを述べられていた。このようにがん患者・家族の、がん遺伝子診断を受けることによる身体、精神社会上の健康的課題について、参加者が認識することができたと考えられる。

遺伝アンケートには「今後遺伝看護に関心をもっていききたいと思うきっかけとなった」という回答が得られていることより、遺伝子診断に関連する様々な場面での看護実践が何に依拠するものであるのかを意識化し、今回のセミナーを生かし専門職として新たな知識基盤を構築することで、より専門性の高い看護実践へと向かうことを期待したい。

「(セミナーの内容が) 知らないといけない知識であることをあらためて認識した」との感想に示されるように、本セミナーの開催が参加者の遺伝看護への関心を高める一助となったと考えられる。今後このようなセミナーでとり上げてほしいテーマについても、遺伝看護をテーマに継続して行われることが希望として出されていた。遺伝学に基づくがん診断や治療は今後さらなる発展を遂げることが予想され、看護師が患者の遺伝子検査や、検査に伴う診断を理解する知識と、がん診療の様々な局面において患者とその家族が抱える多様な課題に対する配慮や遺伝子診断に関する適切な情報提供、遺伝診療を専門とする部門との連携を調整する高い実践能力が求められる。

本セミナーにおける経験を踏まえ、高度ながん看護実践者の知見や実践能力の向上のため、今後のがん医療に携わる看護師に向けた教育的取り組みに生かしていきたい。

謝 辞

今回の聖路加がん遺伝看護セミナーは2011年3月18日開催を予定していたが、3月11日の東日本大震災の発生と、その後続いた余震に加え、不安定となった交通や計画停電などの状況に鑑み、参加者の安全確保を第一に開催日時を延期したものである。セミナーの開催延期にあたり深いご理解のもとご講演をいただきました演者の武田祐子先生、川崎優子先生、角田ますみ先生、全国よりお越しいただいた参加者の皆様に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 川崎優子. (2010). “がんの遺伝学”の基礎, ナーシングトゥデイ. 25 (12). 18-22.
- 2) Joanne Itano, Karen Taoka (Ed). (2005). Core Curriculum for Oncology Nursing 4th. Oncology Nursing Society
- 3) Rebekah Hamilton. (2009). Nursing Advocacy in a Post-Genomic Age. Nurs Clin North Am. 44 (4). 435-446.
- 4) 武田祐子. (2010). 「がん遺伝看護」を学ぶ必要性. ナーシングトゥデイ. 25 (12). 23-27.